SEKIJUKU
project

地域連携講座
「夕塾」報告

富山大学芸術文化学部准教授　　伊東　多佳子

北日本新聞社の協力により、平成 18 年から開催されてきた地域連携講座「夕塾」は、学生と市民が同じ場所でゲスト講師の講演を聴き、講演後に参加者全員が意見を交換しともに語らうことで、これからの地域社会のありかたを考え、よりよい地域づくりにむけた取り組みの発端になることを目指すものです。

最終の第 4 期となる今年度は、「国際交流―世界と地域をつなぐ」というテーマを掲げ、美術館、映画、日本語教育、留学という、さまざまな分野から講師を招いて、それぞれの分野から見た国際交流の現状や新しい試みを紹介しました。 4 回シリーズのうち、第 1 話および第 3 話に関しては、伊東順二教授をホストに迎え、世界的な舞台で活躍している講師による、日本から世界へ向かう国際交流のありかたを、第 2 話および第 4 話に関しては、富山在住の講師による、世界から日本へ向かう国際交流のありかたについてともに考えることにしました。

4 回ともに、芸術文化学部（高岡キャンパス）コミュニケーションルームにおいて、18 時 30 分から 20 時に行いました。

第 1 話

平成 21 年 12 月 2 日（水）

「美術を地域にひらく金沢 21 世紀美術館の活動」

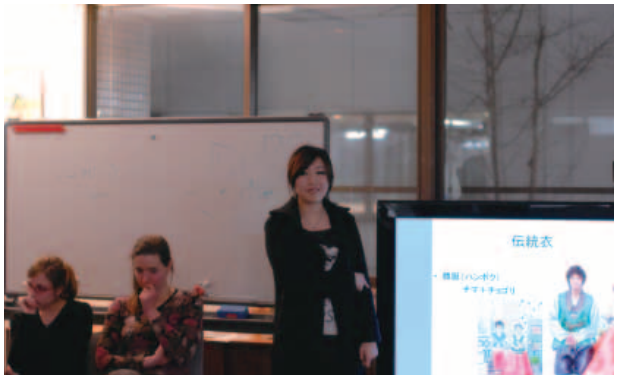
講師　：秋本雄史（金沢 21 世紀美術館館長）

ホスト：伊東順二（芸術文化学部教授）

美術館はどのように世界と地域をつなぐか、ということを考える上で、金沢 21 世紀美術館は、金沢というきわめて古い伝統が息づく地域において最先端の現代芸術の世界を紹介するという困難な問題に取り組み成功した、稀有かつ突出した存在といえると思います。秋本氏は、金沢２１世紀美術館が 2008 年に行った展覧会「金沢アートプラットホーム 2008」を取り上げ、美術館として、キュレーターとして、世界と地域をつなぐ事例を紹介してくれました。「金沢アートプラットホーム 2008」は、公演や商店街、街中の空き家などを活動の場に、19 組のアーティストが形式にとらわれない作品を展開し、多くの人が参加するワークショップや展覧会を街中で開催するプロジェクト型の展覧会です。ここでアーティストたちは、地域においてサイト・スペシフィックな活動をするのですが、外国からの参加アーティストだけでなく、日本のアーティストも地域との直接的な出会いの中で、アートを通じて対話を生み出していくことになります。アートを通して人が出会い、新しい出来事が起きる、そして人々に対話が生まれ、社会のさまざまな部分に架け橋ができ、街がより豊かな場所へと変わっていく、そうしたことを目指すこの展覧会の副題は「自分たちの生きる場所を自分たちでつくるために」というものです。美術

館は、ただ芸術作品を展示し、紹介するという立場から、もっと積極的に地域社会を、ひいては自分たちの生きる場所をつくり、考えて行く基盤になろうとしている、という新しい動きについて、そしてキュレーターの役割についても説明してくれました。今回のホストを務める伊東順二教授もまた、ヴェネツィア・ヴィエンナーレをはじめとする世界的なキュレーターとして日本を代表する現代美術の第一人者であり、さらに長崎県美術館の館長を務めていたことも手伝って、「現代美術」、「美術館」、「キュレーター」についての話題はより一層深く興味深いものになりました。

参加者たちからは、キュレーターを目指すにはどうしたらよいかという質問をはじめ、地域の人たちに芸術を理解してもらうためにはどうするべきか、どうしたら魅力的な展覧会が企画できるか、などの活発な質問が出ていましたが、秋元氏はひとつひとつ真剣に答えてくれました。夕塾終了後も熱心な学生との対話は続き、とりわけ美術館を進路として考える学生たちにとっては、有意義で非常に刺激になる講演であったといえます。



第２話

平成 22 年 1 月 7 日（木）

「目を開いて耳をすまして—留学生の日々—」

講師：

富山大学芸術文化学部

成貞淑（韓国出身）、ルヴサンシメド・セレンゲ（モンゴル出身）、李陶（中国出身）

プラハ美術工芸大学（チェコ）

アンナ・チュムリブスカー、エリシュカ・ヴァイスゲルベロヴァー

カペラゴーデン美術工芸学校（スウェーデン）

ペッテル・イーバション

大学が考える国際交流のまず一番目に挙げられること、それは留学です。今回は、富山大学芸術文化学部に在籍する正規留学生（私費外国人留学生入試に合格し、四年間富山大学で勉強する学生）３名と短期留学生（学術交流協定を結んだ大学からの留学生）３名をゲスト講師に迎え、日本の暮らしで感じたさまざまなことを座談会方式で語ってもらいました。通訳として深谷公宣講師にも参加してもらいました。

留学生たちにとっては、日本での生活そのものが、異文化との遭遇です。食生活、日常のさまざまな出来事、生活環境、すべてが異なる中で、戸惑い、混乱し、それでも学生生活を送りながらなんとかサバイバルしていく留学生たちの奮闘ぶりを本人たちの言葉で、リアルに伝えてもらうことがねらいでしたが、聴講した学生たちにとっては、きわめて身近な「国際交流」についてあらためて認識し、より深く考えてもらうまたとない機会になりました。

富山大学での学生生活についての話題では、「美術」や「工芸」の指導方法や技術の伝承についての考え方の自国との違いが語られ、これには参加していた教員たちもか

なり興味深く耳を傾けていました。

芸術文化学部の中で、たった３名しかいない正規留学生たちは、一学年に一人ずつというきわめて少数であるため、ともすればさまざまな問題が学部の中で見過ごされがちです。富山大学の中にある留学生のためのさまざまな制度も高岡キャンパスではなかなか適用されていないのが現状で、たとえばチューター制度も十分に活用されておらず、講義を理解することにも留学生は苦労しています。また、今回の夕塾によって、始めて留学生同士が顔を合わせることになった、ということも驚きです。今後、本当に身近な国際交流を考えていく上で、留学生の学業と生活を支える仕組み作りに真剣に取り組む必要があることを、改めて認識しました。

参加者たちは、日頃あまり顧みることのない、富山での生活、日本の文化について改めて考えてみるきっかけとなり、身近な生活のさまざまなことから、各国の環境問題まで、じつにさまざまな質問を留学生にしていました。また、留学に関心のある学生はとりわけ熱心に、大学の制度や講義内容、外国語の習得のしかたなどを訊ねていました。

第３話

平成 22 年 1 月 13 日（水）

「映画の中の中国、映画の外の中国」

講師　：本木克英（映画監督）

ホスト：伊東順二（芸術文化学部教授）

映画の世界で、国際交流はどのようになされているか。富山市出身の映画監督、本木克英氏の監督デビュー作『てなもんや商社』は、中国を相手にした貿易商社で働くOLの奮闘ぶりを描いたコメディ映画ですが、この作品を制作するまでには、大変な苦労がありました。中国でのロケを実現させるためには中国電影局による台本の検閲作業を経る必要があります。本木監督はこの気の遠くなる作業の中で、中国の文化、コメディに対する理解や感覚の違いを思い知らされることになります。中国当局の役人の再三にわたる執拗な台本書き直し要求にもめげることなく、最終的には信頼を得て、他の日本人監督が今まで許可されたことのない場所でのロケに成功したエピソードを、実際に『てなもんや商社』の映像を交えながら紹介してもらいました。中国ではとくに仕事をする際には、まず人と人との信頼関係を築くことから始めないと、なにもすることはできないということ、その信頼を築くことは容易ではないけれど、いったん築いてしまえば、思い描いた以上のことに答えてもらえることがあるということ。中国という近くて遠い国の、外見はさほど変わらないように見えるのに、商慣習や価値観が根本的に違うことをしっかり理解して、中国と交流する必要があることを、本木氏は説明してくれました。

さらに、最近制作される予定だった、中国・韓国・日本の３カ国合作映画が、それぞれの国の意見の違いから頓挫してしまった経緯と、各国の映画業界の状況についても話してくれました。

参加者たちは、ほとんどいままで知ることのなかった、中国の文化や風俗について、とくに映画制作にまつわるさまざまなエピソードに驚いていましたが、とにかく本木氏の巧みな話術に終始笑いの絶えない大変楽しい講義になりました。当日は激しい吹雪の荒れた天候のため、参加者が少なかったのですが、映画に関心のある学生や市民の参加もあり、映画を通しての国際交流の現場について普段聴くことのできない話を聴ける有意義な機会となりました。

第４話

平成 22 年 1 月 28 日（木）

「国際交流の裏側」

講師：山下昌代（日本語講師）

「国際交流―世界と地域をつなぐ」というテーマの最終回は、18 年のキャリアを持ち、現在までに 21 カ国 720 人の外国人に日本語を教えてきた日本語講師の山下昌代さんに、地域で生活している外国人の現状、日本人とのトラブルなどの問題点や課題について話してもらいました。これまでにも 2003 年、2004 年、2006 年の３回にわたり、北方領土の国後島に日本語教師として派遣された実績もある山下さんは、現在は富山県内の小学校３校、中学校２校と高校１校の外国人児童・生徒に日本語を教えているほか、自宅でも日本語の教師を開いています。富山県内の登録外国人の国籍の構成は、中国人（商工会議所や商工会の仲介による招聘研修生が多い）、ブラジル人（工場の派遣労働者、請負事業者が多い）およびパキスタン人、バングラデシュ人（中古自動車販売業などが多い）に特徴が見られます。これらの登録外国人の子供たちの教育現場では、日本語によるコミュニケーションがとれないためにさまざまなトラブルが起きています。学校では、不登校、怠学、学費未払いの問題、地域では、地域行事や共同作業への不参加、騒音やゴミ問題、さらには犯罪に至るまでさまざまな問題が日常的に起きています。これらの問題は日本語によるコミュニケーション障害だけでなく、外国人のそれぞれ自国での生活習慣と日本の生活習慣が大きく異なることから生じるものがほとんどです。

日本がこれから国際社会の中に生きていくためには、地域の国際交流の問題に対してきちんと対応していくことが必要となります。まず日本に在住する外国人の日本語教育を充実させていくこと、そして、外国人と共存していく必要のある地域の住民たちも、わかりやすい日本語で、日本の生活習慣や生活様式の違いを根気強く説明していくこと、こうした当たり前の努力で互いのコミュニケーションを緊密にして、互いを理解することがなによりも必要だということを、山下さんはとくに強調していました。そして、外国人という他者を知ると同時に日本という国や日本人という自分についてきちんと知ることが、国際交流においてはきわめて重要だということを話してくれました。

参加者たちは、文化や宗教、生活習慣の違いから生じるさまざまな誤解や地域の国際交流の現状を知り、外国人と関わることの難しさや大切さを学びました。学生たちは、日本の文化や伝統についてよく学ぶことのできる芸術文化学部においてもなお、国際交流について再び自分たちの足元からきちんと学ぶことの重要さを認識していました。

まとめ

国際交流は、なによりもまず人と人とのコミュニケーションを基礎に成り立つものです。それぞれ自国の文化、生活習慣、生活環境、価値観を背負う私（個人）が、それぞれの国を代表するものとして、他者（外国）に出会うという経験が国際交流を支えているのです。今回の夕塾では、美術館館長、映画監督という、芸術や文化の分野から、留学生や地域の日本語講師というきわめて日常的な分野まで全９名の講師を招いて、「文化」という言葉の意味の外延の広さを改めて認識するとともに、地球市民として生きる個人としての責任についても自覚させられる有意義な連続講義となりました。会期が年度の後半に集中したことと、宣伝の不十分さから充分な数の参加者を実現できませんでしたが、内容的には芸術文化学部における夕塾の締めくくりにふさわしいものになったと思います。